

<実践報告>

学童クラブにおける不登校児童のスライム教材との関わり

西澤久恵 岡谷市立小井川小学校学童クラブ
土井 進 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

Children Who Refuse to Go to School and A Teaching Material "SURAIMU" in a School Child Club

NISIZAWA Hisae : Koikawa Elementary School Child Club, Okaya City
DOI Susumu : Faculty of Education, Shinshu University

This article reports SURAIMU making gives an opportunity of attending the class to children who have refused to go to school.

【キーワード】スライム 学童クラブ 特殊学級 信大 YOU 遊サタデー

1. はじめに

平成 12 年 1 月に文部省が発表した小学校の不登校児童は全国で 2 万 6 千人で、前年度よりも増加した。岡谷市においては 65 人であった。「学校へ行きたいのだからいけない」という悩みをもっている児童や親に、学童クラブの立場でできることをしてあげたいものだと願っていた。そうした折に校長先生から依頼があり、学童クラブで不登校児童を 3 名預かることになった。学童クラブに登校した児童に指導員がスライムなど興味のある遊びを通して関わることにより、3 人がそれぞれ元のクラスに戻れるようになった。本稿では学童クラブ指導員の A 児への関わりについてスライム教材を中心に報告する。

2. 不登校児童とスライム教材

2.1 不登校児童の状況

三人の不登校児童についての情報交換を行うために校長、教頭、生徒指導主任、学級担任と学童クラブ指導員が月に 1~2 回懇談会を開いてきた。

A 児：3 年生男子、性格は優しく思いやりがあり責任感もある。食べ物の好き嫌いが多くわがままである。人から言われたことを大変気にする。学童クラブに入るまでの様子は次の通りであった。欠席日数は 1 年生のとき 54 日、2 年生のとき 157 日。不登校になり始めたのは 1 年の 3 学期からで、2 年のときは全く授業に出られなかったが、放課後図書館へ本を借りに来る日があった。不登校になった原因は不明である。学童クラブへの入所のきっかけは、校長と学童クラブ指導員が A 児の母親に、2 年前不登校になりそうになった子が学童ク

ラブに来ることによって元気に登校できるようになった事例を紹介したことであった。A児の母親は事例の母親と知り合いだったので、この話を聴いて学童クラブに期待を寄せA児を入所させることになった。

B児：A児の姉で5年生。3年生のときから不登校であったが、平成11年4月より弟と一緒に学童クラブに来るようになり、少しずつクラスに入れるようになった。

C児：1年生女子。平成11年10月より不登校であったが、平成12年1月より学童クラブへ来るようになり、3月8日からクラスに入れるようになった。

2.2 学童クラブでの生活

岡谷市では下校後、保護者が家庭にいない児童に対して正しい生活指導を行うとともに児童の健全育成を図るため学童クラブを設置している。入所できる児童は原則として1年生から3年生までである。学童クラブは学校の敷地内に別棟として設置されている。児童は宿題、おやつ（おやつ作り）、自由遊び、誕生会、季節の行事（はじめの会、七夕、クリスマス、新年会、まゆ玉づくり、節分、ひなまつり、おわりの会）などをして過ごす。入所費用はスポーツ保険（450円）とおやつ代のみである。開設時間は下校時から午後5時までだが、特別の理由がある時は変更できる。学童クラブでは児童は家庭的な雰囲気の中、異年齢の子ども達と触れ合いながら楽しく過ごしている。

2.3 学童クラブへのスライム教材の導入

西澤がスライムと出会ったのは、平成10年（1998年）5月に信州大学松本キャンパスで行われた第14回「信大YOU遊サタデー」においてであった。学童クラブに来ていた子どもたちの理解を深め、子どもたちに役立つことを何か学んで帰りたいと願って参加したのであった。「信大YOU遊サタデー」に参加する前と後では、学童クラブの子どもたちに接する筆者自身の気持ちが大きく変わっていることに気がついた。それは、「人間は人間によってのみ人間となることができる。」という叡智の言葉に接し、不登校の子どもたちへの関わりも策や方法ではなく、彼らに関わる学童クラブ指導員の人間性を磨いていく不断の努力にこそ解決の鍵があることに気づいたことと、スライム作りの喜びを学童クラブの子どもたちにも体験させてやりたいという気持ちが高まっていたからに違いない。早速、スライムの材料を準備して学童クラブの子どもたちに教えたところ予想以上のものすごい人気であった。

漆戸邦夫（1998年）によれば、信州大学教育学部では理科専攻の2年次生が「化学基礎実験」の授業において、水溶性高分子化合物の不溶化、ゲル化、分子間架橋反応機構等の化学専門知識を学ぶためのモデル教材としてスライム作りに取り組んでいる。ここで学んだ学生が平成6年（1994年）に始まった第1回「信大YOU遊サタデー」において「宇宙生物スライムをつくろう」の講座を開いたところ、子どもたちの笑顔があふれ、学生たちの目も輝いた。これ以来平成11年までの6年間に「信大YOU遊サタデー」は19回実施されたが、毎回必ず開講され、毎回定員を越える幼児・児童の申し込みがあり、桁外れの人気を集めてきているのはスライムをおいてほかにはない。

2.4 スライムの作り方と教材の特性

山本進一（1992年）によればスライムはアメリカ生まれである。日本ではツクダオリジナルの商標である。市販品はポリビニルアルコールではなく、Guar Gum（主成分はGuaran

という多糖類)のゲルである。用意するものはホウ砂、洗たく糊(PVA)、水、食紅(絵の具)、ビニールコップ、割り箸であり、作る手順は次の通りである。

- ①ビニールコップに水と洗たく糊を入れる。
 - ②食紅などで色をつける。
 - ③色がついたら四ホウ酸ナトリウム(ホウ砂を飽和水溶液にしたもの)を入れる。
 - ④割り箸でかき混ぜ固まったらコップから出す。
- 以上のように行なうとぶよぶよとしたスライムができあがる。また、スライム教材の特性としては次のことがあげられる。
- ①ホウ砂と洗たく糊を購入すれば他のものは身近にあるので材料の準備が手軽である。
 - ②低学年でも簡単に短時間でできる。
 - ③出来上がりの瞬間が体感できる。手のひらで柔らかい感触を楽しむことができる。
 - ④何色にも色づけができるので、色と色を組合せて色彩を楽しむことができる。
 - ⑤様々に混ぜ方の工夫ができるので、失敗を恐れさせず工夫する喜びを与えることができる。
 - ⑥丸めたり伸ばしたりできる。自分の好きな大きさや形にでき、他の色とつないだり混ぜたりできる。
 - ⑦好みの固さに変えられる。手につかないようにもできる。
 - ⑧粘土のような臭いがなく衛生的である。
 - ⑨ポリ袋に入れて水分の蒸発を防げば長い間安定である。このポリ袋ごと冷蔵庫に保存すれば、保冷剤や氷嚢代用品としても使える。
 - ⑩乾燥させて焼却処分することができる。

3. 学童クラブでのA児の様子と指導員の対応

(A：A児，T：学童クラブ指導員，学童：学童クラブを表わす。)

月・日	A児のことば・経過	指導・支援・評価
4/7 1日目	<p>母親と一緒に午後1時過ぎに学童に来る。スライムとアイスクリームを作ったが、スライムには大変興味を示す。友達の声が聞こえると窓をしめ耳をふさぐ。</p> <p>下校時間後、職員室へスライムを持って行き先生方に褒めて頂く。</p> <p>A：「先生ってやさしいんだね。」(3回も言う) Nちゃん(同級生の女子) いろいろ言うからいやなんだ。」</p>	<p>TはAが来るのを窓から見ていた。Aは「待っていてくれてうれしい」という感じで学童の部屋に入ってくる。母親は40分位して帰っていたが5時に迎えに来てもらう。お迎えの際、Aはスライムを服につけ大変気にしていたので「Aちゃんが元気に遊んだっていうことだから、汚してもいいですよ」と母親に叱らないよう話をする。帰り際にAの手を握り、「お友だちになれたよね」と目と目を見つめ合った。「さようなら」とお互いの姿が見えなくなるまで手を振って分かれた。</p>
4/8 2日目	<p>TがAの家まで迎えに行く。Aは学童でトイレに行きたくなくても友達の声が聞こえるからと一度も行かな</p>	<p>指導員と一緒にお弁当のおかずを交換しながら食べる。「付いていってあげるから」と言っても全くトイレ</p>

	<p>かった。学童の友達2人と仲よく遊び、一緒に帰った。</p> <p>A：「先生、スライムの夢みたよ。朝6時に起きたからねむくなっちゃった。」</p> <p>A：「悩みがあるんだ、先生聞いてくれる？学校にいけないんだ。」</p> <p>T：「学童は学校なんだけど。毎日学童に来ていけばクラスにいけるよ</p> <p>うになるよ。」</p> <p>A：「スライム失敗したら困るなあ。」</p> <p>T：「失敗は成功のもとして言うから気にしない、気にしない。」</p>	<p>に行こうとしなかった。母親に心配していること、悩んでいることを子どもに伝えないように、「いってらっしゃい」と明るく送り出すようにとアドバイスをした。</p> <p>(一人で作らせた)</p>
4/9 3日目	<p>Aの母親は「家の中がとても明るくなった」と嬉しそうに話した。</p> <p>フィルムロケットで遊ぶ。始めは怖がっていたが次第に興味を示す。</p> <p>A：「給食食べたいなこの部屋で、担任の先生、この先生だったらいいなあー。」</p> <p>T：「先生は〇〇先生(担任)大好きだよ。こんど教室へ行こうかな。」</p> <p>A：「スライム作るときさあー、糊を先に入れたらどうなるのかなあ？水を入れないでできるのかなあ？」</p> <p>T：「どんどん自分で考えたことはやりましょう。失敗は成功のもとだもんね。」</p>	<p>フィルムロケットの音に驚き、床にのびてしまったA。あわててTがAの胸に手をやり「どうしよう、心臓が止まっている。死んでしまった。」と大げさに言うと、「こんなことで死んでたまるか」と急に起き上がり、にっこり笑った。</p> <p>Aは大変驚いたようすであった。</p> <p>友達数人に囲まれて少し戸惑った場面もあったが、仲よく一緒に帰っていった。3日目でこんなにも良くなった。Tは「少しずつ良くなってくればよいのに」と思った。</p>
4/12 4日目	<p>1年生Kが初めて学童に来る。AはKの面倒をよくみる。そしてKが帰る際、</p> <p>A：「あしたも頑張って学校へくるんだよ。」とカバンをたたきながら言った。</p>	<p>カバンをたたきながらKに言った言葉は、TにはAが自分自身に言い聞かせている言葉であるように思えた。</p>
4/14 6日目	<p>Aは1年生にスライムをととても張り切って教える。</p> <p>A：「絵の具をいれた方が早く固まるんだよ……。」</p> <p>A：「図書館へ行くのはいいけど友達に囲まれるのがいやなんだー。」</p> <p>A：「お父さんが学童は学校ではないって言うんだよ。先生、学童</p>	<p>TはAを「スライム博士」と呼んだりして自信を持たせる。かなり自分で進んで作れるようになっていたので、Tは余り手を出さないようにした。1年生に対してとても親切に教えていたのでTは嬉しく思った。絵の具の件はAの発見である。気がついたことを褒めTも教えてもらった。水の代わりにお湯を使ったほう</p>

	<p>は学校なんだよねー。」 T:「そうだよー。学童は学校だよ。今度お父さんにも学童へ来ていただこうかな。」</p>	<p>がよく固まるということも教えてもらった。父親の一言はとても傷ついたようでTに切なそうに話してくれた。こんなにも頑張ってきているのに無神経だと思った。 担任の先生方が学童に来られ一緒に遊ぶ。</p>
4/15 7日目	<p>「今日は給食が食べれる。」とって元気よく学童にきた。給食室まで取りに行くことは出来なかったが、食後は食器を給食室に返すことが出来た。 A:「学童の家の借りているお金だれが払うの?」 T:「学童は学校だから学校と同じなんだよ。」 A:「学校と同じっていうことは校長先生が家賃を払っているんだー。」 T:「そうではなくって、税金を使っているんだよ。Aくんのお父さんが一生懸命働いたお金の中からも出してもらっているんだよ。」</p>	<p>好き嫌いが多い子だと思っていたが文句も言わずに全部食べることが出来た。楽しみにしていた様子がよくわかった。友達に行き会いたくないと思い取りにいけなかったが、Tが「誰にも合わなかったよ。」と話す。「食器は返しに行く。」と言ってくれた。</p>
4/16 8日目	<p>給食のメニューがAの大好きなカレーということもあり、給食を取りに行くことができた。多目に盛っておいしそうに食べていた。 歯科検診を保健室で一人受ける。 A:「友達からいろいろ言われるのがイヤなんだ。」 T:「どうして言われるのかしら。」 A:「学校へ行かないからだと思う。」 T:「あわてない、あわてない。言いたい人には言わせておけばいいの。」 A:「先生が一緒ならいいかもしれない……」(小さな声で)</p>	<p>昨日誰にも会わなかったことを話すとAはTと指切りをして取りに行く。友達には会わなかったが先生二人には会ってしまう。だが別に気にはしなかった。 担任の先生が歯科検診について相談に来てくれる。 校庭にみごとに咲いた桜を二人並んでながめた。「きれいだねー」と言いながら、楽しかった今日一日、そして明日も…と期待を持たせたいと思った。</p>
4/17 9日目	<p>父親が学童来る。Aは早速スライムを父に教える。 A:「お父さん、スライムの作り方教えてあげるね、まずー……」 子どもの言うことを熱心に聴きながら父も作る。その後、父子はシェンガ、縄とびなどで一緒に遊ぶ。Aはとても楽しそうだった。</p>	<p>Tは父親に学童は学校であることの説明をした。そして、子どもに張り合いをもたせ、励ますようにたくさん話しかけてほしいとお願いした。</p>

4/21 12 日目	A は学童の子ども達と仲よく遊べるようになってきた。	1年の算数ドリルを少しやり始めた。学童は勉強するところでもあることを話した。
4/22 13 日目	学童の子ども達と一緒に A もお花見に出かけた。「雪が降っているようだね。」と口々に言いながら、花びらが風に吹かれて散るなかを散歩した。A も皆と一緒に集団行動ができ楽しかったようだ。	迎えにきた母親に「少し勉強をしたほうが良いと思う。」と T が話すと、母親は手を横にふり「やらせないでください。小学校の勉強はできなくても大人になって困らない。せつかく学校に来れるようになったのだから、イヤになってしまうと困ります。」と言った。しかし、1年の復習を5分間位から始めるということで納得していただいた。
4/27 16 日目	A は1年生の面倒をよく見ている。3年の友達とも本当に楽しそうに遊んだ。 A：「片付けは1年生やらなくてもしかたないから、ボク達でやりますか。」	A より早く学童にきた子ども達が、「先生、Aちゃんはどうしたの?」と心配する。 A が「こんにちは」と元気に入ってきたのでホッとする子ども達。学童の子どもたちが T と同じ気持ちでいてくれることが嬉しい。
5/1 19 日目	A：「夕べ38度の熱が出たけれどがんばってきたんだ。」 (給食にでたヨーグルトを見て) A：「ヨーグルトは何が幸せかねー。ボクたちに食べられることかなー。」 T：「Aちゃんの幸せはなんだろう?」 A：「生きています。友達と遊んだり、おいしいものを食べたり……」	「熱が出たときは休んだほうがいいよ。」と T が声をかける。ても学童へ張り切ってきている様子が良く分かり嬉しく思う。 A から「生きている」ということ、という言葉が出てきたとき、とても大切なことを教えてもらったように思った。
5/7 21 日目	学童で学校の畑を借りることになった。特殊学級と一緒に作業することになり、M (知的障害をもった女子) とともに張り切って畑を耕した。また、苗を T と買いに行き一生懸命運んでくれた。 A：「早く植えたいなあー。」	A と M は同じクラスなので、お互いによく知っていた。このことがきっかけとなり、特殊学級にも行かれるようになり、クラスとのつながりも一層もてるようになってきた。
5/11 23 日目	A：「そろそろ休まないと、お母さん一人でかわいそうだ。そうだ！今日の給食で出たダルマパンのクリームを残して持って行ってあげよう！」 T：「Aちゃんが学校へ来ているのと休んでいるのとどちらがお母さん、うれしいって言ってくれるかな?」	A の優しい母親への想いが出ているが幼い感じがした。そこで「1年生は朝から来て頑張っているけど、A君は何年生だっけ?」と言うと、「ええ、どうせボクは赤ちゃんですよ。」と返す。お母さんのためにパンを残すことは良くないと指導したが、「お腹がいっぱい。」と言ってクリームの方を残し家に持ち帰った。
5/12	校長先生が学童に来て給食を食べて	A に関われる先生方に協力をお願い

24 日目	<p>くださることになった。 (食後に食器を返しに行ってきた) A:「こわくなかったー。こわくなかったんだよねー。」と自分に言い聞かせていた。 (クラスのふれあいの時間に校庭でサッカーをやることになる。) A:「なんて言って、みんなの中に入れていいんだろうー。」 (担任が後ろを向いている姿を見てとまどう。) 同級生が「Aのキックはすごいなあー」と感心して見ていた。 特殊学級のM:「A君ガンバレー」と大きな声援を送ってくれた。</p>	<p>したところ、校長先生が真っ先に来てくださった。 A は友達の中へは怖くて行かれないと思っていたが、T と何回か行ったり来たりしているうちに、いつしか入って行かれるようになり、A 自身が驚いていた。 同級生が A を呼びに来てくれた。始めは戸惑っていたが、「おねがいます。」と言って入ろうと T がアドバイスをし、ポンと肩を叩いて送り出した。</p>
5/15 27 日目	<p>特殊学級の教室でA、Aの母親、特殊学級担任、M、栄養士、そして T がともに給食を取る。食事をしているところへ校長先生が顔を出してくださった。A は大好きなカレーを食べご機嫌であった。</p>	<p>母親に特殊学級の様子を見てもらいたいと考えた。A に大勢で食事する楽しさを知ってもらいたいと考えた。</p>
5/17 28 日目	<p>午前 10 時に A と母親が特殊学級へ来た。Mと一緒に学級の畑の看板を書いた。 給食は栄養士の先生と食べたが、食器には嫌いな野菜ばかりが残っていた。栄養士の先生:「Aく、このゴマあえは先生が朝から作ったものなんだよ。食べなければ捨ててしまうんだけど…そしたら悲しいなあ。」 この一言に A:「じゃあー、アスパラ6個食べよう。」(食べ終わって)「もう少し食べてみるか……」とほとんど食べる事ができた。 5 時間目、特殊学級担任に図書館、クラスへも連れて行っていただき、自然と友達と関わる事ができた。 A:「先生、ボク、教室へ行かれたよー。イスにも座ったんだ。」 T:「わあっー、すごい!」 抱きしめようとしたら逃げられ、追いかけてこになり、部屋のなかをグルグル二人で飛び回った。</p>	<p>Mとの触れ合いを多くすることにより、Aが何かを学んでほしい、という願いを持って特殊学級への登校を勧めた。 好き嫌いの多いAに栄養士の先生に直接指導して頂いた。 ついにクラスに入っていくことが出来た。特殊学級担任に上手に引っ張って頂き、Aはクラスに行くことが出来た。 すごく頑張って勇気を出した結果だと思ふ。こんなにも早く行くことができTはとても嬉しく思った。 Aもとても嬉しかったようだ。</p>
5/18 29 日目	<p>2 時間目からの体育からクラスでの授業に出席する。図書館へも一番最後についていくのではなく、列の前</p>	<p>大好きな体育の授業からクラスに戻った。 クラスでの様子を T は参観させても</p>

	<p>から三番目に並んでいて、T に手をふってくれた。A と T は学童で給食を取ったあと、食器を返しに行った帰りにクラスに寄った。</p> <p>T : 「A さんの机はどこ？」</p> <p>A : 「ここ。」</p> <p>と言って思わず椅子に腰かけた。そして隣の子と楽しそうに話を始めたので T は学童へ帰る。</p> <p>A は今日、学童では給食を食べただけであった。</p>	<p>らった。</p> <p>意図的ではあるのだが自然にさりげなく指導した。</p>
5/28 35 日目	<p>A : 「先生、これからクラスへ行って給食を食べますから……」</p> <p>T : 「ああ、そう。」</p> <p>T がしっかりうなづかないうちにさっさとクラスへ行ってしまった。</p> <p>初めてクラスで給食を取ることができたこの日を境にして、学童での給食はなくなった。</p> <p>A : 「先生、帰ります。」</p> <p>と言うだけで帰っていく日が多くなった。</p>	<p>本当に良かったなあーと思う反面、一抹の寂しさも感じた。</p> <p>A の「帰ります。」という力強い挨拶は、「先生、今日も頑張ってクラスに行ってきたよ。」と言って語りかけてくれているように T には思われてならない。</p>

3 年になってからの A 児の欠席日数は 4 日のみであった。

4. 考察

不登校であった A 児が、学童クラブに来たことがきっかけとなって再びクラスに戻ることができた背景には次のような要因があったと考えられる。

(1) 学童クラブに来た第 1 日目にスライム作りを行ない、夢にまで見るほどの楽しさを味わった。そして、スライム作りをする楽しさを目当てにして毎日学童クラブに通うことができるようになった。1 年生や父親にも喜んでスライム作りを教えることができたことによって、A 児は次第に自信を回復していった。

(2) 学童クラブ指導員は A 児に、「あなたが来てくれてよかった。ありがとう。」という気持ちを根本に接しようと努めた。まず①心をこめて(誠意をもって)じっくり話を聴くことに努めた。子どもは実に敏感である。結局人を動かすものは真心である。次に②楽しく過ごすように心掛けた。大きな声で、生き生きと、明るく、自然に、ユーモアも忘れずに、張り合いを持たせるように努めた。指導するばかりでなく、謙虚な気持ちを持ち、子どもからも色々なことを教えてもらうように心がけた。そして③「声かけ」は「肥えかけ」であると思って、気がかりな子どもに対してはすぐに行動するようにした。例えば B 児が夏休み明けに一時学校へ来られなくなったときのことである。母親も学級担任とともに「しばらくそっとしておいてください。」とのことであった。しかし、学童クラブの子どもたちが「B ちゃん、このごろ来ないね。」ととても心配していたので、その思いを手紙に書いた。すると翌日来てくれたのである。子どもたちは大喜びで B 児と両手をつなぎ、前に後に囲み帰っていつ

た。これがきっかけとなって続けて来られるようになった。

(3)学童クラブは学校の敷地内にあるので、学級担任やクラスの友達とも行き会え、授業に出てみたいと思えばいつでも行くことができ、給食も取ることができた。「学童クラブは学校である。」このことがA児にとって大変励みになったと考えられる。

(4)学童クラブの子どもたちが温かくA児を迎え入れてくれたことが大きな支えになった。例えば縄とびをしていた時のことであるが、「くまさん、くまさん、右手をあげて……」と皆でやっていてA児の番になった時、誰からともなく「Aちゃん、Aちゃん、右手をあげて……」という替え歌になり、縄とびをしているA児を学童クラブの子どもたちが皆で丸く囲み声を合わせて歌ってくれた。また、いじめられそうになると学童クラブの子どもたちが助けてくれた。子どもって本当に素晴らしい。なぜならA児が本当に来れるキッカケを作ってくれたのは学童クラブの子どもたちであり、クラスの友達であった。

(5)特殊学級のM児との交流はA児にとって心の支えになった。M児はボクがついているからと言って、いたわったり、励ましたり、なぐさめたりしてくれた。また、学校全体で特殊学級とのふれあいにも力を入れているので、A児も差別されることなく特殊学級も居心地の良い場所になった。

(6)不登校ゼロの学校をめざして学校全体で指導体制を組み、学童クラブ指導員も校長先生はじめ学級担任の先生方と連携したことが大きな力となった。児童は一人の教師だけでなく複数の教師と関わり、様々な人間性に触れることが必要なのだと思う。また、不登校児童の母親や学級担任が学童クラブ指導員の意見によく耳を傾けてくださった。また、学童クラブ指導員は心のゆとりを持つことが重要で夫の陰の協力で心から感謝している。

7. 終わりに

「学校に来れるようになって良かった！」

A児と肩をならべて歩いていたときに、嬉しそうにつぶやいたA児のあの笑顔は今でも鮮明に覚えている。しかし、これで全て終わったわけではない。現在A児は普通の子どものように朝から来ているのではなく、2時間目からとか給食からとか不規則の状態である。ただ運動会、遠足、音楽会などの行事がある時は普通の子どものと同じ行動が出来るまでに回復した。学童クラブ指導員としてこれからも気を抜くことなくA児を見守っていきたいと思っている。初めての経験であったが大きな感動を味わうことができた。

謝辞：不登校児童を救うことになったスライム作りを教えてくださいました「信大 YOU 遊サタデー」の学生の皆様に感謝致します。

【参考文献】

漆戸邦夫（1998年）「人気の体験的学習素材」『日本教材学会会報 No.38』

土井進編（1995年）『第一期「信大 YOU 遊サタデー」の実践—体験的学習の指導による実践的力量的の形成—』信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター

土井進編（1996年）『第二期「信大 YOU 遊サタデー」の実践—体験的学習の指導による実

- 実践的力量の形成一』信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター
- 土井進編（1997年）『第三期「信大 YOU 遊サタデー」の実践—体験的学習の指導による実践的力量の形成一』信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター
- 土井進編（1998年）『第四期「信大 YOU 遊サタデー」の実践—体験的学習の指導による実践的力量の形成一』信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター
- 土井進編（1999年）『第五期「信大 YOU 遊サタデー」の実践—体験的学習の指導による実践的力量の形成一』信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター
- 東原義訓・土井進編（2000年）『第六期「信大 YOU 遊サタデー」の実践—体験的学習の指導による実践的力量の形成一』信州大学教育学部附属教育実践総合センター
- 西澤久恵（2000年）「不思議な出逢いを大切に」『フレンドシップ事業報告書 第六期「信大 YOU 遊サタデー」の実践』信州大学教育学部附属教育実践総合センター
- 山本進一（1992年）『化学と教育』40巻 841

（2000年3月31日 受付）